AMDA 多様性の共存 ジャーナル

2026 年 10 月 25 日　VOL.49　第 319 号
発行／ AMDA　〒 700-0013　岡山市北区伊福町 3-31-1　2026 年 秋 号
TEL 086-252-7700　FAX 086-252-7717
E-mail:member@amda.or.jp

秋

救える命があればどこまでも

令和8年熊本地震被災者緊急支援活動

特定非営利活動法人アムダ（AMDA）
https://amda.or.jp/
特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構
https://www.amda-minds.org/
特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター
https://www.amdamedicalcenter.com/
AMDA 兵庫　http://amda-hyogo.com/



2026 年 7 月 28 日に発生した熊本地震を受け、AMDA は発災翌日の 7 月 29 日より熊本県内で緊急支援活動を開始しました。先発隊は地震発生のニュースを受け、翌日早朝の出発を決定しました。博多到着後にレンタカーを借り、益城町、熊本県庁などを訪問しながら、被害状況と支援ニーズの把握を進めました。

その後、宇土市、宇城市方面へ南下するにつれ、建物の損傷が目立つようになり、氷川町周辺では倒壊した家屋を数多く確認しました。地域によって被害の程度に大きな差があることを実際に確認しながら八代市へと入っていきました。熊本労災病院に設置されていた八代地域保健医療福祉調整現地本部、八代市災害対策本部などから情報を収集し、避難所の状況確認を開始しました。

八代市内には多数の避難所が開設されていたため、先発隊はまず比較的規模の大きな避難所を複数訪問し、アセスメントを行いました。避難所によって状況は異なり、空調やトイレが使用できる施設がある一方、上下水道が使用できず、トイレの衛生管理や清掃用品、生理用品の不足が課題となっている施設もありました。また、簡易ベッドがなく、高齢者や立ち上がりが困難な方が床で生活している状況も確認しました。

こうした状況を踏まえ、約 350 人が避難していた八代市立第四中学校を支援拠点とすることを決定しました。当時、同避難所には医療チームによる常駐・巡回支援がなかったため、7 月 31 日から医師・看護師による避難所内の巡回診療を開始するとともに、診療スペースを設置しました。

活動を続ける中で、避難者の健康を守るためには、診療だけでなく生活環境そのものを整えることが不可欠であることを実感しました。上水道が使用できなかったため、トイレ使用後に流す水を学校のプールからくみ上げ、多数のバケツに分けて準備する作業を繰り返しました。衛生用品や清掃用具を購入して館内・仮設トイレを清掃し、使用方法の掲示なども行いました。清掃後には避難者から「トイレがきれいになった」との声も寄せられました。

また、高齢者や要介護者への対応として段ボールベッドを支給していただき、特に立ち上がりが困難な方を優先して設置しました。ベッドの導入後は、利用者本人の動作が改善しただけでなく、介助する家族からも負担が軽減したとの声が聞かれました。このほか、専用更衣スペースの設置、衛生環境の改善、ラジオ体操の実施、感染症発生時の隔離・管理など、その時々の避難所の状況に合わせた支援を継続しました。





さらに、熊本県、八代市、DMAT をはじめ、内閣府、経済産業省、国土交通省などの関係機関とも情報を共有し、段ボールベッド、パーテーション、入浴設備、車いす、炊き出しなど、現場で把握したニーズを行政へつなぎました。時間の経過とともに店舗やガソリンスタンドが営業を再開する一方、入浴や洗濯など新たな生活課題が生じるなど、被災地のニーズが刻々と変化していくことも実感しました。

（2P に続く）

令和８年熊本地震被災者緊急支援活動 （1P からの続き）

こうした医療・生活支援に加え、８月 12 日から 20 日までは鍼灸師による鍼灸支援を実施しました。避難所では長期間の床上生活や慣れない環境による腰痛、膝痛、肩こり、疲労、不眠、ストレスなど、急性期医療とは異なる健康課題が目立つ時期となっていました。



鍼灸師らは、身体症状の改善のみを目的とするのではなく、「心身一如」の考えを意識し、傾聴や日常的な会話を大切にしながら施術を行いました。刺激量にも配慮し、「ホームランではなく確実なヒット」を目指すように、被災者の身体に過度な負担を与えない施術を心掛けました。

当初は鍼への不安や遠慮から施術を断る避難者もいましたが、日常の会話を重ねることで徐々に信頼関係が生まれていきました。「思ったより痛くなかった」「身体が少し楽になった」といった声が聞かれるようになり、臀部痛を訴えていた 70 代男性が、施術後に痛みなく歩けたことを喜び、わざわざ報告に来られたこともありました。

こうした積み重ねにより、鍼灸活動は避難所内でも少しずつ受け入れられるようになりました。活動後半には、１日の避難者数の 25％以上にあたる方が施術を受ける日が何日か続くようになり、鍼灸支援が避難生活の中の一つの身近な支援として定着していきました。これは単に施術を希望する方が増えたというだけではなく、日々の会話や施術を通じて鍼灸師と避難者との間に信頼関係が築かれていった結果でもあったように感じました。



また、長年毎日日記を書き続けていた 79 歳の男性が、施術後、その日の記録に「鍼治療を受け、腰が楽になった」と担当鍼灸師の名前を書き、「私の歴史にあなたの名前を残しました」と伝えてくださったエピソードもありました。鍼灸師にとっても、施術そのものだけではなく、対話を通じて被災者が少しずつ心を開き、表情が和らいでいく過程が強く印象に残りました。

活動初期には施術者の確保にも苦労しました。被災地の鍼灸師自身も被災し、家族や自院への対応が必要であったため、隣県の鹿児島などから応援を受けて活動を立ち上げました。その後、派遣された鍼灸師が活動を引き継ぎ、最終的には地元の施術者へとつないでいくことができました。鍼灸活動の最終日には、涙を流しながら鍼灸師との別れを惜しむ避難者の姿も見られました。



今回参加した鍼灸師からは、「災害支援の中で鍼灸がこれほど役立つことを実感した」との感想も寄せられました。痛みや身体的不調を和らげることに加え、施術中の会話や触れ合いが安心感を生み、心のケアにもつながっていたことが感じられました。今回の活動は、災害支援における鍼灸の役割や可能性を改めて実感する機会となりました。



AMDA は８月 23 日をもって第四中学校での支援活動を終了しました。発災直後の医療支援から、衛生・生活環境の改善、高齢者・要介護者支援、感染症対応、そして鍼灸による心身への支援まで、避難者のニーズの変化に応じながら活動を継続することができました。

今回の活動を通じて改めて感じたのは、災害支援は医療だけで完結するものではないということでした。トイレを清掃すること、ベッドを整えること、行政へ必要な支援をつなぐこと、身体の痛みを和らげること、そして何より被災された方の話に耳を傾けること。その一つひとつが避難生活を支え、被災された方々の健康と尊厳を守るための大切な支援となりました。

（大西　彰、祖母井　利昭）

現在ご寄付受付中の活動

＊緊急救援　＊令和８年熊本地震　＊ネパール大規模洪水　＊ウクライナ人道支援　＊ AMDA 中高生会
＊ AMDA フードプログラム　＊インド・AMDA ピースクリニック　＊カンボジア　＊こども食堂支援
＊災害事前対策　＊内視鏡技術者協力事業　＊ネパール医療支援　＊ルワンダ学校保健

ベネズエラ地震被災者緊急支援活動



2026 年 6 月 24 日、相次ぐマグニチュード 7.2 と 7.5 の地震に襲われた南米ベネズエラでは、建物の崩壊により、多くの人々が住む場所を失いました。死者は 6,300 人を超えています。（9 月 18 日、汎米保健機関『PAHO』発表）

地震発生後、AMDA は同じく南米にあるペルー支部の協力の下、情報収集を開始し、6 月 30 日に緊急支援活動の実施を決定しました。7 月 5 日から 8 月 15 日まで、佐藤拓史理事長をはじめ、日本人医師 2 名、看護師 2 名のほか、ペルーからベネズエラ人医師 3 名、看護師 1 名を現地に派遣。被害の大きかったラ・グアイラ州において、現地団体『Cruz Azul USM』や地元医師らと協力し、医療を中心とした緊急支援活動を行いました。



AMDA が最初に被災地に入ったのは、地震発生から約 2 週間後でしたが、現地では依然として粉塵が舞う過酷な状況の中、崩壊現場での救助活動やがれきの撤去が続いていました。実施した巡回診療では、活動にあたる救助隊の体調チェックを行ったほか、生存者が発見された場合に備え、作業現場で待機することもありました。

一方、AMDA が医療支援活動を行った仮設診療所では、体調不良を訴える患者の診療に加え、必要に応じて超音波検査も実施しました。呼吸器疾患、高血圧症や糖尿病などの慢性疾患の悪化、さらに、がれきの撤去や救助活動中に負った外傷など、さまざまな症状に対応し、地域住民への継続的な医療提供の一端を担いました。



また、「お腹の赤ちゃんの様子を確認したい」と診療に訪れた妊婦もおり、チームの看護師によれば、「震災による不安や精神的なストレスから足を運ぶ人もいるように思う。今回の活動は、人々の安心感にもつながっていると感じた」ということです。

今回、一緒に活動した地元医師らが中心となり、『AMDA ベネズエラクラブ』が発足しました。今後は同クラブと連携しながら、現地のニーズを踏まえ、必要な支援について検討していきます。（岩尾　智子）

コロンビア地震被災者緊急支援活動

2026 年 8 月 10 日、南米コロンビアをマグニチュード 7.4 の地震が襲いました。AMDA コロンビア支部の協力を得て情報収集を進め、8 月 30 日、日本人看護師 1 名を現地に派遣しました。同日、看護師は同支部および現地協力団体『サラマンドラ財団』が拠点を置くバジェ・デル・カウカ県カリ市で関係者と合流し、今後の活動について話し合いました。



8 月 31 日、9 月 1 日および 4 日には、カリ市に設置された、同財団の仮設診療所にて活動しました。地震により閉鎖中のクリニックや、診療体制に影響が出ている病院もあったため、同財団は地域のニーズに応じた支援を続けていました。



また、9 月 2 日と 3 日には、関係者とともに震源地のある西部チョコ県を訪問。病院や教会で、薬や点滴セットなどの医療資材を提供し、被害状況を確認しました。訪問した病院では屋根が剥がれ落ちるなどの被害があったものの、現在も機能していると説明を受けました。

翌 4 日には AMDA 本部、コロンビア支部、サラマンドラ財団の 3 者でミーティングを行い、活動状況を共有するとともに、今後の支援について意見交換を行いました。（岩尾　智子）

2026年フィリピン・ミンダナオ島地震被災者緊急支援活動



2026年6月8日、フィリピン・ミンダナオ島南部でマグニチュード7.8の地震が発生しました。AMDAは発災直後から現地関係者との連絡を開始し、支援計画を固め、17日に日本から調整員2名（岡山倉敷フィリピーノサークルより1名）を派遣しました。

現地では、地元のロータリークラブや自治体などと連携し、被災地域の状況やニーズを確認しながら支援を実施しました。また、活動期間を通じて、地元の学生で構成されるローターアクトクラブのメンバーにも継続して活動を支えていただき、彼らとともに活動できたことは、とても印象深い思い出となりました。震源地に最も近いグラン町では2地区の計300世帯に米や缶詰などの食料を配布し、ジェネラルサントス市サンホセ地区では245世帯に衛生用品を届けました。また95世帯には仮設テントの補強に使用する防水シートも配布しました。活動最終日には、町長との面談の際に要望を受けた復旧用資材としてセメント100袋をグラン町へ再び届けることができました。



今回、短期間の活動であっても、現地の協力団体と連携することで、「支援すべき場所に、すべきタイミングで、必要とされているものを届ける」ことができたことが大きな成果だと感じました。

AMDAは、現地の人々が主体となって支援を継続するローカルイニシアチブを重視しています。今回も現地団体の活動開始を後押しし、その後は現地団体主導で他国のNGOや民間企業とも協力しながら支援活動を広げていきました。緊急支援において、現地の力を生かし、次の支援へつないでいくことの重要性を改めて実感しました。（祖母井　利昭）

10年目を迎えたモンゴル内視鏡技術協力プロジェクト



AMDAが2017年から続けてきたモンゴル内視鏡技術協力プロジェクトが、10年目を迎えました。モンゴル国立医科大学、日本モンゴル教育病院の協力の下、基礎的な内視鏡治療やシミュレーターを用いた研修に加え、内視鏡先端治療技術の指導を行っています。この事業では、小倉記念病院消化器内科主任部長の白井保之医師とモンゴル人医師が協力して治療にあたり、食道・胃静脈瘤の治療技術が着実に現地に根付いています。

今回の研修には、近郊から15名の内視鏡医も参加しました。また、首都ウランバートルから車で約5時間、ロシアとの国境に位置するセレンゲ県総合病院では、佐藤拓史理事長と日本モンゴル教育病院の内視鏡チームが、救急医療と消化器疾患への救急対応について講演と実習を実施。約90名の医療者が参加し、活発な質疑応答が行われました。



こうしたこれまでの功績が認められ、昨年の佐藤理事長に続き、白井医師にもモンゴル国立医科大学から客員教授の称号が授与されました。就任式には、同大学の学長をはじめ、これまで共に歩んできた医師、関係者が出席。家族のように喜びを分かち合う、温かく心に残る祝福の場となりました。さらに、AMSA（アジア医学生連絡協議会）モンゴル支部の医学生たちとも交流し、医療技術を通して世界とつながることの意義と楽しさについて、円座になって語り合い、互いの協力に期待が高まるひと時となりました。（難波　妙）

2026年ネパール大規模洪水被災者緊急支援活動



2026年8月26日、ネパールと中国の国境付近で大規模な洪水・土石流が発生し、甚大な被害が生じました。AMDAは発災直後からAMDAネパール支部と連携し、被災状況や支援ニーズの把握、関係機関との調整を進めてきました。

10月5日、AMDAネパール支部はラスワ郡ウッタルガヤ村の村長からの要請を受け、AMDAダマック病院長を含む4名の医療チームを派遣しました。

活動地へ向かう途中、橋の損壊により車両での移動が困難となりましたが、チームは仮設の歩行者用の橋を渡り、徒歩や地元の交通手段を利用して移動しました。また、地域住民の協力を得て医薬品や医療物資を搬送し、活動地に到着後、仮設診療所で診療活動を開始しました。AMDAは今後も現地関係者と連携し、被災者のニーズに寄り添った医療支援を継続してまいります。（あるちゃな　ジョシ）

2026年度AMDA中学高校生会ネパール研修



AMDAでは昨年に引き続き、2026年度もAMDA中学高校生会のネパール研修を実施しました。今回の研修は8月7日から14日にかけて行われ、参加者はネパールの文化や習慣、医療、人々の暮らしに直接触れ、国際交流やボランティア活動について学びました。

参加した高校生4名は、AMDAネパール支部が運営するAMDAダマック病院を訪問。帝王切開や内視鏡検査などの医療現場を見学したほか、患者や医療従事者と交流しました。また、看護専門学校の学生や現地高校生との交流、ブータン難民キャンプでの活動見学、ホームステイ、文化遺産や寺院の訪問なども行われました。これらの体験は、参加した高校生にとって、ネパールの医療や文化、言葉、生活、そして多様な価値観を学ぶ貴重な機会となりました。（あるちゃな　ジョシ）



＜参加者からのコメント＞

「今回の研修を通して、現地で言語や文化、食べ物、生活様式、マナー、価値観など、日本との違いをたくさん知ることができました。特に、私の夢は助産師になることなので、AMDAダマック病院で病棟や分娩室を見学できたことや、間近で帝王切開に立会って産声を聞き、産まれたばかりの赤ちゃんを抱っこしたことは一生の経験です。産婦人科病棟を掃除したことで、少しでも患者さんや医療従事者の皆さんの力になれたのかもしれないと感じて嬉しくなりました」

ネパール子ども病院へ医療機器を贈呈



AMDAネパール支部が運営するネパール子ども病院（正式名称：『シッダールタ母と子の病院』）は、ネパールの首都カトマンズ以外で初めて設立された母子保健に特化した病院で、毎日約10人の赤ちゃんが誕生しています。同病院では新生児集中治療室（NICU）や小児集中治療室（PICU）を備えているため、合併症のある妊婦やハイリスク妊娠の患者が周辺地域から搬送され、安全に出産できる体制が整えられています。

一方で、これまで母体集中治療室（マタニティーICU）が整備されていなかったため、出産後に母親の容体が悪化した場合には、別の医療機関へ搬送せざるを得ないという課題がありました。現在、同病院ではマタニティーICUの新設を進めており、6月中旬、ネパールを訪問した菅波茂前理事長によって、生体情報モニター3台とシリンジポンプ1台が届けられました。これらの機器はAMDA兵庫および同病院の設立に尽力した故篠原明医師のご遺族が寄贈したものです。これらの機器が、新たに開設されるマタニティーICUで活用され、多くの母親と赤ちゃんの命を守ることにつながることを願っています。（あるちゃな　ジョシ）

ご協力ありがとうございました

2026 年 6 月～ 8 月分（敬称略）

AMDA 中学高校生会　子ども食堂の取り組み



AMDA 中学高校生会では、この夏、今年度の活動の軸である「防災」と「子ども食堂」のうち、子ども食堂をテーマに二つの活動を行いました。

8 月 9 日、子ども食堂の勉強会を開催しました。講師には、『AMDA こども食堂支援プラットフォーム』の事務局長を務める岡山こども食堂支援センターの直島克樹先生をお招きしました。講義では、子ども食堂が子どもの貧困対策として始まったこと、これまで自治会や子ども会などが担ってきた地域のつながりに代わり、子ども食堂が必要な場所になっていることなどについてお話がありました。中高生ができる取り組みとして、「宿題を見たり一緒に遊んだり、同年代だからこそできることがある」との助言もいただきました。



8 月 22 日には、岡山市中区の『旭東ぽかぽか食堂』でのボランティア活動にメンバー 6 人が参加しました。食堂は、子どもからお年寄りまで、地域の誰もが「ただいま」と集まれる場所として、主催者ご家族を中心に、親類や友人、地域の方々、高校生など、多くの人たちの協力によって運営されています。メンバーは、公園の遊具への安全クッションの取り付け、配膳、子どもたちとの水遊びなどに取り組みました。この日の参加者は 109 人。開始直後は少し表情が硬かったメンバーも、次第に慣れ、子どもたちと積極的に関わる姿が見られました。

この活動を通じ、中高生が子ども食堂のためにできる防災について検討を進めていきたいと考えています。

（安孫子　芙美）

AMDA インターナショナル会議 2026



2026 年 9 月 19 日から 20 日にかけて、インドネシアのスラウェシ島マカッサルにある国立ハサヌディン大学（UNHAS）にて、『AMDA インターナショナル会議 2026』が開催されました。

在マカッサル領事事務所の大橋貢一所長ご出席の下、会議には、日本、バングラデシュ、インドネシア、ネパール、インド、韓国、台湾の AMDA 各支部の代表者が集い、それぞれの活動や今後の計画について発表しました。

また、菅波茂前理事長が 1980 年に設立した医学生を主体とする団体『AMSA』（アジア医学生連絡協議会）から、AMSA インドネシア支部、AMSA 台湾支部も参加し、それぞれが取り組んだ昨今の災害支援活動等について報告しました。



今回の会議では、2 年間を任期とする AMDA インターナショナル（AMDA の各国支部によって構成される支部間連携組織）の代表が、AMDA インドネシア支部から AMDA バングラデシュ支部へと引き継がれました。

今後も AMDA インターナショナルは、各国・地域の支部や AMSA に在籍する医学生たちとの連携を深めながら、災害支援をはじめとするさまざまな活動に取り組んでまいります。（あるちゃな　ジョシ）

中国銀行 AMDA ボランティア定期預金 30 周年記念企画 ロビー展・窓面広告



2026 年 8 月、中国銀行の AMDA ボランティア定期預金の取り扱い開始 30 周年を記念して、本店営業部と奉還町支店にて AMDA の活動を紹介するロビー展を開催いただき、本店営業部の南側ガラス面には窓面広告を 3 面設置していただきました。

ロビー展では、パネルを通じて AMDA の設立からの歩みとともに、国内外における主な支援活動を紹介しました。窓面広告は路面電車が行き交う大通りに面し、「救える命があればどこまでも－これからも岡山の皆様とともに」というメッセージを掲げました。多くの方の目に触れる場所で、AMDA の活動を知っていただく機会となりました。



AMDA ボランティア定期預金では、中国銀行のお客様が定期預金を通じて AMDA の世界各地での活動を支えてくださっています。この 30 年の間、多くのお客様のお志が、被災地へ支援を届ける大きな力となってきました。

30 年にわたり温かいご支援をお寄せくださった中国銀行の皆様、地域のお客様お一人おひとりに心より御礼申し上げます。（安孫子　芙美）

学生インターンの紹介：景山栞さん（ノートルダム清心女子大学）



「はじめまして。ノートルダム清心女子大学英語英文学科 3 年生の景山栞です。8 月から 11 月下旬まで、AMDA でインターンシップをさせていただいております。私は中学生の頃、生徒会活動の一環として、ユニセフの募金活動に参加したことがきっかけで、将来は世界中の困っている人を助けたいと思うようになりました。大学で英語英文学科を選んだのも、英語を通して世界中の人々とつながり、その夢に一歩近づきたいと考えたからです。ずっと国際的な人道支援活動がしたいと考えてきたため、AMDA で活動させていただける機会は、私にとってかけがえのないものになると思います。

これまでには、ハイチでの活動に関する助成金申請に向けて、AMDA ハイチの支部長と英語でやり取りをする機会があり、実際に仕事で英語を使うことの難しさを実感しました。同時に、言葉を通して海外の方とつながり、自分にも活動を支えることができるということがとても嬉しく、達成感がありました。

残りのインターンシップでは、AMDA の活動について理解を深めながら、広報や子ども食堂での活動に参加したいと考えています。広報では若い世代の視点から AMDA の魅力を発信し、子ども食堂では子どもたちや地域の方々との交流を通じて、支援について学びたいです。一つ一つの経験を自分自身の成長につなげながら、前進してまいります。どうぞよろしくお願いいたします」

AMDA 特別対談　数学者 秋山仁 × AMDA 理事長佐藤拓史　40 年越しの師弟対談



AMDA 公式 YouTube にて配信中！ 19 歳の青年は、有名な数学者にどうしても会いたくて、新聞記者のふりをして勤務先に電話をかけた。「弟子にしてください」。その一歩が、彼を医師の道へ、そして世界の医療の現場へと導いていく。一方の数学者もかつて、辞書を引きながら一行ずつ英文の手紙を書き、海の向こうの恩師のもとへ飛び込んだ。待っていても、奇跡は起こらない。

出会いから 40 年以上――東京理科大学栄誉教授で AMDA 理事の秋山仁先生と AMDA 理事長の佐藤拓史が改めて語り合います。